

<b>Title</b>	孟郊交遊考(その二)
<b>Author</b>	齋藤, 茂
<b>Citation</b>	人文研究. 50 卷 8 号, p.493-511.
<b>Issue Date</b>	1998-12
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

## 孟郊交遊考（その二）

齋 藤 茂

### △一△高官及び庇護者（承前）

前稿で取り上げた陸長源と鄭餘慶は、孟郊の庇護者と言いうる立場にあつたが、友人の韓愈を除けば、他に庇護者と呼べる人物は見当たらない。そこで、以下にはまず彼の座主である呂渭を取り上げた後、引き立てを求めて詩を献じた高官達について、概ねは贈詩の多少に従つて、順に見てゆくこととする。

### （3）呂渭（七三五～八〇〇）

呂渭は『旧唐書』卷一三七、『新唐書』卷一六〇にそれぞれ伝が立てられている。記述がやや詳しい『旧唐書』

の伝、及び『元和姓纂四校記』などに拠れば、河東の呂氏の出身で、字は君載。父の延之は乾元二年（七五九）から三年、越州刺史、浙江東道節度使を勤めた。渭の進士及第の時期は明らかではないが、『唐方鎮文職僚佐考』では「呂渭及び夫人柳氏の合葬の墓誌（呂渭及夫人柳氏合葬墓誌）」（『隋唐五代墓誌匯編』洛陽卷十二所収）に基づいて、浙東觀察使の杜鴻漸（上元元年～七六〇～）（一年在任）に招かれて、左金吾衛兵曹參軍を以て掌書記となつたと判断しているので、それに従えば天宝末か至徳、乾元中に及第を果たしたのであろう。上記「墓誌」では「公は弱冠にして進士の高第に挙げられ、浙上に歸寧す（公弱冠舉進士高第、歸寧浙上）」と記す。『僚佐考』ではさらに「墓誌」に「兵部尚書□□□山越を平らげ、浙東を鎮め、又た公を辟して節度巡官と為す（兵部尚書□□□平山越、鎮浙東、又辟公爲節度巡官）」と記すのを承けて、宝曆元年（七六一）から大曆五年（七七〇）まで浙東觀察使となつた薛兼訓のもとで節度巡官を勤めたと見る。薛兼訓が兵部尚書となつたという記録は見当たらないが（両『唐書』とも薛の伝は無い）、恐らくその判断は妥當であるう<sup>①</sup>。『旧唐書』の伝では、婺州の永康県令を勤めたことが記されるが、婺州は浙東觀察使の管轄に属するので、その任もこの時期のことと見られる。ついで浙西觀察使の李涵（大曆七年～七七二～十一年～七七六～四月在任）に招かれ、大理評事を以て觀察支使となつた（のち監察御史となり、さらに殿中侍御史に転任）。『旧唐書』伝には、その後御史台の彈劾を受けて歙州司馬に左遷されたと記すが、上記「墓誌」に拠れば「何くも無く楚州司馬に移る（無何移楚州司馬）」とあり、さらにつきこの楚州司馬の時に、淮南節度使の陳少遊（大曆八年～七七三～十月～興元元年～七八四～十一月在任）に招かれて節度參謀となり、ついで檢校禮部員外郎を以て觀察判官に、さらに觀察判官はそのままに考功郎中兼侍御史となつたという。貞元二年（七八六）に舒州刺史となり、その後朝廷に入つて吏部員外郎、駕部郎中、中書舍人などを歴任した。貞元十一年（七九五）から十三年までの三年間、禮部侍郎として続けて知貢舉を

勤め、十三年九月に潭州刺史、湖南觀察使に転じて、十六年七月在任のまま卒した。温、恭、僕、讓の四人の息子があり、このうちの温は柳宗元、劉禹錫らと交流して文名が高かった。

孟郊が呂渭と関係を持ったのは、恐らく科挙受験の時が初めてであろう。誰かの推薦を受けた可能性も有るが、具体的なことは分からぬ。及第を果たしたのは十二年春の受験の際であるが、孟郊はそれ以前に八、九年の両年にわたって受験に失敗していた。従つて、上位の及第ではなかつたにせよ、呂渭の抜擢は彼にとつて實に有り難いことであつた。著名な「登科後」(卷二)では、合格の喜びを率直に表している。

昔日齶齶不足誇 昔日の齶齶は誇るに足らず

今朝放蕩思無涯 今朝 放蕩として 思い涯て無し

春風得意馬蹄疾 春風 意を得て 馬蹄疾し

一日看盡長安花 一日にて看尽くさん 長安の花

合格の祝宴で作られた「同年春謙」(卷五)に拠れば、この年の合格者は三十名であった(「少年三十士、嘉会良に茲に在り 少年三十士、嘉會良在茲」)。しかし『登科記考』卷十四に記す名を見ると、状元の李程を除けば、その後高官に至つた者や文名を馳せた者はほとんど無い。また孟郊が親しく付き合つたと見られる者も居ない。「同年春謙」詩の最後に「願わくは金石の志を保ち、奪移有らしむる無かれ 願保金石志、無令有奪移」と歌つてゐるが、容易に吏部の試験に受からず、官途に苦しんだ孟郊には、結局同年及第者に親しい友人はできなかつたのであろう。

さて呂渭との交流であるが、孟郊の詩集には及第後に郷里に報告に帰る際に贈つた「擢第後に東帰し懷を書し

て坐主の呂侍郎に献ず（擢第後東歸書懷獻坐主呂侍郎）（巻六）が一首残されるだけである。まずその全体を掲げよう。

昔歲辭親淚	昔歲 親に辞して涙し
今爲戀恩泣	今 恩を恋うるが為に泣く
去住情難并	去住 情は并わせ難く
別離景易戢	別離 景は戢まり易し
夭矯大空鱗	夭矯たる大空の鱗は
曾爲小泉蟄	曾ては小泉の蟄たり
幽意獨沈時	幽意 独り沈みし時
震雷忽相及	震雷 忽ちに相い及ぶ
神行既不宰	神行 既に宰せざれば
直致非所執	直致 執る所に非ず
至運本遺功	至運 遺功を本とし
輕生各自立	輕生も各おの自立す
大君思此化	大君 此の化を思い
良佐自然集	良佐 <sup>おのの</sup> 自然と集まる
寶鏡無私光	宝鏡 私光無く
時文有新習	時文 新たに習う有り

慈親誠志就	慈親誠志就り
賤子歸情急	賤子帰情急なり
擢第謝靈臺	第に擢んでられて靈台に謝し
牽衣出皇邑	衣を牽いて皇邑を出づ
行襟海日曙	行襟海日曙け
逸抱江風入	逸抱江風入る
蒹葭得波浪	蒹葭波浪を得
芙蓉紅岸濕	芙蓉岸濕に紅なり
雲寺勢動搖	雲寺勢動搖し
山鐘韻噓吸	山鐘韻噓吸す
舊遊期再踐	旧遊再び踐むを期し
懸水得重挹	懸水重ねて挹むを得ん
松蘿雖可居	松蘿居るべきと雖も
青紫終當拾	青紫終には當に拾うべし

始めの四句で帰郷のために座主と別れる悲しみを言い、続く十一句で抜擢の謝意を述べるのだろう。「天矯」はここは飛騰の意。「小泉の蟻」が「大空の鱗」となったとの表現に、登龍門をくぐり抜けた喜びが率直に表され、それが続く句の感謝の意につながっている。後半はこれから帰郷の旅路を描くが、その始めに置かれた「慈親

誠志就り、賤子 帰情急なり」の一句には、「遊子吟」(巻一)でも知られる親孝行な孟郊の、親の期待に添い得た喜びがよく表れている。ちなみに韓愈の「貞曜先生墓誌銘」(『韓昌黎集』巻二九)によれば、孟郊の科挙受験は母親の命によるものであった(「年幾んど五十にして、始めて尊夫人の命を以て來りて京師に集い、進士の試に従い、既に得て即ち去る。年幾五十、始以尊夫人之命來集京師、從進士試、既得即去」)。「行標」からの二句は、王湾の「北固山の下に次る」詩の「海日 残夜に生じ、江風 旧年に入る 海日生殘夜、江風入舊年」を連想させる。また「岸濕」の語は見慣れないが、「濕岸」を韻の関係で倒置したものか。「雲寺」以下の四句で山居の楽しみに言及するのは、進士及第を果たしたものの、なお仕途を得られなかつたことの裏返しであろう。最後の二句は、漢の夏侯勝の「經術苟も明らかなれば、その青紫を取るは俛して地芥を拾うが如きのみ」との言葉(『漢書』夏侯勝伝)を踏まえて、将来への自負を表すが、そこには同時に座主と門生の関係に頼つて、今後の更なる引き立てを呂渭に期待する意も込められていると思われる。

現存の作品には他に呂渭との関係を直接示すものが無く、この後呂渭とどういう関係を保つて行つたのかは明らかでない。すでに見たように、呂渭は十三年九月に湖南觀察使に転じ、十六年に当地で卒しているので、十六年によろやく吏部銓試に合格して溧陽県令を授かる孟郊には、直接援引を求める機会の無いままに関係が終わってしまったのだろう。また前稿で触れたように、孟郊は十三年の暮春か初夏に汴州の陸長源の元に身を寄せるが、十五年春に陸の元を去るに際して、呂渭の幕下への招聘を求めた様子は見られないの、座主と門生という関係ではあっても、結局親密な関係はきずけなかつたのかもしれない。息子の呂溫とも、とくに交際が有つたとは認められない。しかし一方では、呂渭との関係が一時的なものに過ぎなかつたとも言い難い面が有る。それは、後でも触れるが、彼の娘婿に当たる豆盧策と柳淳の二人②に詩を贈つてゐるからである。その詳細はそれぞれの項

で検討するが、両者との交流は恐らく呂渭との関係に由来するものであろう。呂渭が三年間のうちに及第させた門生達と、官界でどういう交遊の輪を作っていたのかは明らかでないが、孟郊もその一員として輪の周辺に加わっていったことだけは確かなようである。

#### (4) 張建封 (七二五～八〇〇)

ここからは引き立てを求めて詩を贈ったり、一時的に身を寄せた高官達について、順次検討してゆく。もっとも、関連する詩が複数現存するのはこの張建封と次の包佶の二人だけである。

さて張建封は、字は本立、鄧州南陽（河南省）の人である③。『旧唐書』卷一四〇、『新唐書』卷一五八にそれぞれ伝が有る。祖父の仁範は地方の県令、父の玠は豪侠として仕えずに終わつたが、いずれも建封が高位に登つたことで官を贈られている。なお父の玠は杜甫と交遊が有り、杜甫は幼時の建封もよく識っていた。大曆四年（七六九）に潭州（湖南省長沙市）で建封と出逢つた杜甫は、「張十二建封に別る（別張十三建封）」詩（『全唐詩』卷二三三）の中で「相逢う 長沙の亭、乍ち問う 緒業の餘。乃ち吾が故人の子、童艸 居諸を聯ぬ 相逢長沙亭、乍問緒業餘。乃吾故人子、童艸聯居諸」と歌つてゐる。

張建封の生涯のあらましを両『唐書』の伝などによつてたどれば、概ね以下のようになる。科挙の登科については記録が無く、『旧書』の伝では宝應元年（七六一）に中使の馬日新と河南副元帥の李光弼が蘇州、常州（ともに江蘇省）辺の匪賊の討伐に向かつた際に、馬日新のもとに詣でて賊の説得に当たることを申し出、その通りに数千人を降伏させたことが最初に記されている。父親譲りの豪侠の性格を感じさせる話である。その後大曆年間に入つて、湖南觀察使（治は潭州）の韋之晉（大曆二年～七六七～四年在任）の幕下に参謀として招かれたり、

義成節度使（治は滑州）の令狐彰（上元二年～七六一～）大曆八年～七七三～在任）に幕下に招かれたりしたが、いずれも長く留まることなくそのもとを去っている。大曆十年（七七五）に馬燧が河陽三城鎮遏使（治は懷州）となると、以前から親しかった縁で判官として招かれ、監察御史を兼務した。ついで十四年（七七九）に馬燧が河東節度使（治は太原府）となると（貞元三年～七八七～まで在任）、引き続いて節度判官として任用され、侍御史を兼務した。建中二年（七八一）頃に馬燧から朝廷に推薦され、宰相の楊炎は度支郎中に任用しようとしたが、盧杞に憎まれて岳州（湖南省岳陽市）刺史に出された。李希烈が叛乱を起こすと、寿州（安徽省壽春県）刺史に登用され、叛乱の討伐に力を尽くした。その功績で、興元元年（七八五）には御史大夫、濠壽廬三州都團練觀察使を兼任している（なお『唐刺史考』では、岳州刺史の任は建中二年から四年、寿州刺史の任は四年から貞元四年～七八八～と見ている）。貞元四年に徐州（江蘇省徐州市）刺史、徐泗濠節度使（一名感化軍節度使）となり、御史大夫、支度宮田觀察使を兼任した。以降十六年（八〇〇）五月に在任のまま卒するまで徐泗濠節度使を勤め、徳宗に深く信頼された。十三年冬に入朝した際には宮市などについて直諫したが、徳宗はこれを嘉納し、翌年春に徐州に戻るに当たってわざわざ詩を賜る恩寵を示している。また死後に司徒を贈られている。

彼は広く人材を招き、厚遇したので、徐泗濠節度使の在任中は、その幕下に多くの名士、文人が集まつた。孟郊も、韓愈らと同様、そうした張建封の人柄に引かれて一時的に庇護を求めたようである。孟郊の集に現存する張建封に関連する詩は全部で五首有り、華忱之の繫年ではいづれも貞元八年（七九二）、彼が初めて科挙を受験して失敗した後、徐州を訪れた折の作と見ている。しかしながら、この繫年は誤りである。韓愈に「孟生詩」（『韓昌黎集』卷五）が有り、これは落第した孟郊を慰めつつ徐州に張建封を訪ねるよう勧めた詩であるが（「我は論ず徐方の牧、古を好みて天下欽うを。……子よ其れ我が言を聴き、以て箴とす所に当つべし 我論徐方牧、好古天

下欽。……子其聽我言、可以當所箴」という一節が有る)、その最後に「卞和三獻を試む、子に期すは秋砧に在り、卞和試三獻、期子在秋砧」と言う点から見れば、この詩は孟郊が二度目の落第をした貞元九年の作でなければならぬまい(錢仲聯『韓昌黎詩繫年集解』へ卷一)でも貞元九年の作と見て居る)。そうであれば、孟郊が張建封のもとを訪れたのも、その年ということになる。また、五首をいずれも同じ年の作品と判断していることにも問題が有る。李翹に「所知を徐州の張僕射に薦むるの書(薦所知於徐州張僕射書)」(『全唐文』卷六三五)が有り、これは彼が孟郊、張籍、李景儉を張建封に推薦する内容であるが、その中で「茲に平昌の孟郊なる有り、貞士なり。伏して聞くに、執事旧とこれを知ると。茲有平昌孟郊、貞士也。伏聞執事舊知之」と、以前に孟郊と張が互いに会つて居ることに言及している。さらに李觀が病死したこと(貞元十年)と韓愈が董晉の招きで宣武軍の觀察推官となつて居ること(貞元十一年より)を記しているので、この文章はそれ以後の作ということになる(張建封が檢校尚書右僕射を加えられるのも貞元十一年である)。李翹の韓愈に対する祭文(「祭吏部韓侍郎文」『全唐文』卷六四〇)によれば、李自身は貞元十一年に徐州から汴州へ行つて(陸長源を頼つた可能性がある)初めて韓愈と逢い、友として交わるようになつたと言う。孟郊は十三年に汴州へ来て十五年初めまで滞在するので、李翹から張建封への推薦を受けたのは恐らく十五年に汴州を離れる折だろう。そうであれば、孟郊は貞元十五年の初春にも張建封のもとを訪れていた可能性が出てくる。以下に述べるように、五首の詩には季節の上で微妙なズレが有り、九年と十五年の二度に分けて繫年するのが妥当であろう。

まず五首の中から、長安を離れる際に韓愈、李觀に答え、兼ねて張建封に献じる意を述べた「韓愈、李觀の別れに答え、因りて張徐州に獻ず(答韓愈李觀別因獻張徐州)」詩(卷七)を挙げて見よう。これは貞元九年の作であることが疑いない。

富別愁在顔	富別は愁い顔に在るも
貧別愁銷骨	貧別は愁い骨を銷かす
懶磨舊銅鏡	磨くに懶うし 旧き銅鏡
畏見新白髮	見るを畏る 新しき白髮
古樹春無花	古樹 春に花無く
子規啼有血	子規 啼きて血有り
離絃不堪聽	離絃 聽くに堪えず
一聽四五絶	一たび聽けば 四五たび絶ゆ
世途非一險	世途 一險に非ず
俗慮有千結	俗慮 千たび結ぶ有り
有客步大方	客有りて大方を歩むも
驅車獨迷轍	車を駆りて独り轍に迷う
故人韓與李	故人 韓と李と
逸翰雙皎潔	逸翰 双つながら皎潔たり
哀我摧折歸	我の摧折せられて帰るを哀しみ
贈詞縱橫設	贈詞 縱横に設く
徐方國東樞	徐方は国の東枢
元戎天下傑	元戎は天下の傑たり

櫬生投刺遊 櫬生 刺を投じて遊び

王粲吟詩謁 王粲 詩を吟じて謁す

高情無遺照 高情 遺照無く

朗抱開曉月 朗抱 晓月を開く

有土不埋冤 土を有ちて冤を埋めず

有讐皆爲雪 讐有らば皆な為に雪ぐ

願爲直草木 願くは直き草木と為りて

永向君地列 永く君が地に向いて列せん

願爲古琴瑟 願くは古き琴瑟と為りて

永向君聽發 永く君が聽に向かいて發せん

欲識丈夫心 識らんと欲す 丈夫の心

曾將孤劍說 曾ち孤剣を将つて説かん

韓愈と李覲とは、多士濟濟で「龍虎榜」と称された前年の進士合格者であり、孟郊は単に二度失敗したという無念さだけでなく、親しい人々の間で自分ひとりが取り残されたという思いが強かった。前半十六句は韓愈、李覲への別れの思いを述べるが、その端々に無念の思いがにじみ出ている。特に「世途一險に非ず」からの四句には、進士への道の予想外の厳しさに戸惑いを感じている印象すら有る。後半は張建封への挨拶だが、自らを櫬衡や王粲に喻えるところに文章の士としての自負が窺える。また最後の六句で、「直き草木」「古き琴瑟」そして

「孤劍」を「」の比喩としたところにも、「古直」を好む孟郊らしさが表れていると言えよう。

この年徐州を訪れた時はすでに晩春であったと見られるが④、その後いつまで徐州に滞在していたのかは明らかでない。広く有為の士を招こうとした張建封のことゆえ、一定の待遇は与えてくれたようだが、及第前であり、性格的に不器用な孟郊には、幕職への取り立てなどは叶わぬ夢であった。しかし張建封に関する詩のうち、「張徐州の席にて岑秀才を送る（張徐州席送岑秀才）」詩（巻八）は恐らくこの年に作られたものであろう。全体を掲げる余裕はないが、詩の後半に「雨余山川淨く、麦熟して草木涼たり。楚涙章句に滴り、京塵衣裳に染む  
雨餘山川淨、麥熟草木涼。楚淚滴章句、京塵染衣裳」という四句があり、このうちの後の二句は彼自身の落第を言つのであろう。また「麦熟して草木涼たり」と言つるのは初夏の景であり、時期的にこの年のことと推定される⑤。なお岑秀才については詳らかではない。どこへ旅立つて行くのかももとより明らかではないが、長安へ出るにはまだ早い時期ゆえ、他の有力者の伝手を求めて出かけたものか。恐らく孟郊同様に援引を求めて張建封のもとへ来ていたのであろう。孟郊の方はこの後湖南まで足を伸ばし、さらに汝州に陸長源を訪ねているので、彼もこの後まもなく徐州を発つたものと思われる。

五首のうち、残る「張徐州に上る（上張徐州）」（巻六）「南陽公が東桜桃亭子の春讌に請かる（南陽公請東櫻桃亭子春讌）」（巻四）「清東曲」（巻一）の三首は、いずれも十五年の作であろう。まず「張徐州に上る」詩であるが、詩中に「再び来る君子の傍、始めて見る精義の多きを再来君子傍、始覺精義多」との表現があるので、二度目の訪問時の作と見て良かろう。また「南陽公が東桜桃亭子の春讌に請かる」と「清東曲」の二首は、内容から同時の作と見られるが、これらは桜桃の花が咲きそめる時期を背景としており、そこからこの年の作と判断される。ここには「南陽公が東桜桃亭子の春讌に請かる」詩を掲げてみよう。

萬木皆未秀	万木 皆な未だ秀でざるに
一林先含春	一林 先に春を含む
此地獨何力	此の地 独り何の力ぞ
我公布深仁	我が公 深仁を布く
霜葉日舒卷	霜葉 日び巻を舒ばし
風枝遠埃塵	風枝 埃塵を遠ざく
初英灌紫霞	初英 紫霞に灌われ
飛雨流清津	飛雨 清津に流る
賞異出囂雜	異を賞して囂雜を出で
折芳積歎忻	芳を折りて歎忻を積む
文心茲焉重	文心 茲焉に重んず
俗尚安能珍	俗尚 安んぞ能く珍 <small>たうと</small> ばんや
碧玉粧粉比	碧玉 粧粉を比べ
飛瓊穰艷均	飛瓊 穰艷均し
鴛鴦七十二	鴛鴦 七十二
花態併相新	花態 併せて相い新たなり
常恐遺秀志	常に恐る 秀志を遺るを
迨茲廣謙陳	茲に迨んで謙陳を広ぐす

芳菲爭勝引

芳菲 勝引を争い

歌詠竟良辰

歌詠 良辰を竟む

方知戯馬會

方に知る 戯馬の会と

永謝登龍賓

永く謝せん 登龍の賓に

冒頭の一旬はまだ春の浅いことを歌うが、同時の作と見られる「清東曲」の冒頭には「櫻桃 花參差たり、香雨紅霏霏たり 櫻桃花參差、香雨紅霏霏」とあるので、これは実景というよりも張建封の惠政を讃える三、四句を引き出すための強調が含まれているのだろう。五句から八句は周りの景色の美しさと清らかさを取り上げ、春宴の場所の好ましさを言祝ぐ。また続く四句は宴に招かれた喜びを言う。十一句目の「文心」は、用例は余り多くないようだが、主人の張建封を中心にここに集った人々の文を重んずる心を言うのだろう。十三句からの四句は、宴席に居並ぶ妓女達が桜桃の花と妍を競っている様子の形容。十七句の「秀志を遺る」と十八句の「謙陳を広くす」は自信が無いが、「遺秀」「広謙（宴）」という習見の熟語の賓語を二字に伸ばし、主人張建封の客をもてなす態度を表したものと解釈してみた。「勝引」は殷仲文「南州桓公九井作一首」（『文選』卷二）の「廣筵汎愛を散じ、逸爵 勝引を紓ぐ 廣筵散汎愛、逸爵紓勝引」に対する李善注に「勝引、勝友也」とあるのに従う。末二句は張への挨拶だが、「戯馬の会」は後に宋の武帝となつた劉裕が徐州の戯馬台で催した文酒の会であり、同じ將軍であることと徐州という場所からこの宴の比擬としたものだろう。また「登龍の賓」は言うまでもなく、張を後漢の李膺になぞらえたものである。全体に侍宴の詩らしい体裁をもつて書かれていると言えよう。

なお題の「南陽公」は、張建封が鄧州南陽の出身であることからそう呼んだものだろう。「清東曲」でも最後に

「南陽公の首詞は、新樂録に編入せられん 南陽公首詞、編入新樂録」⑥と歌われる他、韓愈の「此の日惜しむべきに足る張籍に贈る（此日足可惜贈張籍）」詩（『韓昌黎集』卷一）の中でも、「僕射 南陽公は、我を睢水の陽に宅せしむ 僕射南陽公、宅我睢水陽」と見える。ただ明徵は無いが、これらの詩がいずれも貞元十五年の作であることを考えれば（そして貞元九年の諸作は韓愈の「孟生詩」を含めてこの呼称が用いられていないことを考慮すれば）、あるいは徳宗から特別の恩寵を被った貞元十三年頃に、南陽郡公などの爵号を賜っているのかもしない。

張建封は、孟郊と交流の有った高官の中では、やはり重要な位置を占める人物と言える。その幕下に二度にわたりて身を寄せたことで贈詩も多く、また侍宴の作も少なくない。しかし、孟郊の徐州での滞在期間はいずれも長きにはわたらなかつた。貞元十五年も、遅くも一月中に越に向けて旅立つてゐる。韓愈や張籍の推薦は受けながらも、結局は幕官として採用されるに至らなかつたことが、一度とも比較的早くそのもとを去つた理由だろう。張は広く人材を招いて、その幕下には名士、文人が多く集まつていたので、孟郊も一定の待遇は受けながらも、とくに目に留まるということが無く、進士及第を果たした後でも幕職を得るには至らなかつたのではないか。そのあたりに当時の任官活動の難しさと厳しさが窺われる。

#### (5) 包佶 (七二六~七九二)

包佶は字は幼正、潤州延陵の人である。父の包融は集賢院学士、大理司直となり、賀知章、張旭、張若虛らと名を等しくして「吳中の四子」と称された。包佶の伝記は、『新唐書』卷一四九の「劉晏傳」に、劉晏に登用され當時に名を知られた一人として付載されるが、甚だ簡略で要を得ない。梁肅に「秘書監包府君集序」（『全唐文』

卷五十八、権徳輿に「秘書包監を祭るの文（祭秘書包監文）」（『全唐文』卷五〇八）が有り、これらと『登科記考』『唐尚書省郎官石柱題名考』『唐僕尚丞郎表』などを参考しつつ、その生涯をたどれば概ね以下のようになる。

天宝六載（七四七）に進士に及第し、代宗朝では元載の援引によって諫議大夫、知制誥に至るが、大曆十二年（七七七）四月に元載の失脚に連座して嶺南へ左遷された⑦。この左遷の処置がいつ解かれたのかは分からぬが、遅くも徳宗の即位（大曆十四年五月）に伴う大赦（同年六月）によって罪を赦されたと見られる。『旧唐書』卷十二「徳宗紀」の建中二年（七八一）十一月の条に、「丁丑：權鹽鐵使、戸部郎中包佶を以て江淮水陸運使に充つ」と見え、『唐僕尚丞郎表』では建中元年三月に權鹽鐵使となり、二年八月には戸部郎中を兼任していたと推定している。「徳宗紀」の建中三年八月の条には「戊辰：江淮鹽鐵使、太常少卿包佶を以て汴東水陸運兩稅鹽鐵使と為す」と見え、さらに貞元元年（七八五）三月の条に「丙申朔：汴東水陸運等使、左庶子包佶を以て刑部侍郎と為す」とあって、左遷の後四年程の使職を経て中央に復帰したことが分かる。刑部侍郎から国子祭酒に転じて（時期や経緯は不明）、翌一年正月に知貢舉となつたが、実はこの年は禮部侍郎の鮑防が先に知貢舉に任命されながら、試験の途中で京兆尹に転じたために、帖經から後を包佶が引き継ぐことになつたのであつた。なお李復言『續玄怪錄』卷一の「李岳州」（『太平廣記』卷三四一では「李俊」）には、この年の進士の受験者李俊が国子祭酒の包佶の伝手で合格する話（包佶は知貢舉ではなく、友人である知貢舉に李俊を推薦する）が記されている。主題は進士合格は命數によって定まっていること、にもかかわらず冥吏への賄賂で一部の変更が可能なことを述べることに有り、内容そのものはあくまで小説家の言と見るべきだが、包佶が登場する点には、あるいは何か実際に即した話が下敷きになつていたのかもしれない。貞元一年春以後の包佶の詳しい経歴は不明で、国子祭酒にいつまで留まつたのか明らかではない。『新唐書』の伝などで分かることは、この後秘書監を拝命して、丹陽郡公に封ぜら

れたことだが、その時期や経緯も詳らかではない。そして秘書監を最後として、貞元八年（七九二）の晚春か初夏に、六十七歳で卒した。

孟郊の作品の中で包佶と関連するものは、「包祭酒に上る（上包祭酒）」（巻六）と「秘書包大監を哭す（哭秘書包大監）」（巻十）の二首であり、それぞれ貞元二年と貞元八年の作と推定される。「包祭酒に上る」は「岳岳たる冠蓋の彥、英英たる文字の雄。瓊音 独り聴く時、塵韻とは固より同じからず。春雲は紙上に生じ、秋涛は胸中に起く。時に吟ず 五君詠、再び挙ぐ 七子の風 岳岳冠蓋彥、英英文字雄。瓊音獨聽時、塵韻固不同。春雲生紙上、秋涛起胸中。時吟五君詠、再學七子風」と、大半を包佶への贊辞に費やし、末二句で「願わくは黄鶴の翅を将つて、一たび借りて雲空を飛ばん 願將黃鶴翅、一借飛雲空」と引き立てを求める意を示す。孟郊はこの時期はまだ受験前であるので、恐らく包佶が知貢舉を勤めたことに着目し、その知遇を得るべく詩を贈ったものであろう。しかし父親の包融ほどには詩人としての才名を馳せることのなかった包佶に対して、「英英たる文字の雄」と讃えているのは單なる褒辞を出るものではなく、挨拶の詩という以上の内容は持っていない。「秘書包大監を哭す」の方は全体を掲げてみよう。

哲人臥病日 哲人 病に臥す日は

賤子泣玉年 賤子 玉に泣く年なり

常恐寶鏡破 常に宝鏡の破れ

明月難再圓 明月の再たび円かなり難きを恐れしが

文字未改素 文字の未だ素を改めざるに

聲容忽歸玄 声容は忽ち玄に帰せり

始知知音稀 始めて知る 知音は稀にして

千載一絶絃 千載 一たび絃を絶つを

舊館有遺琴 旧館に遺琴有るも

清風那復傳 清風は那ぞ復た伝わらん

包佶の卒した貞元八年は、孟郊が初めて受験して落第した年であった。「玉に泣く」は和氏の璞の故事を踏まえる。權徳輿の祭文の日付が五月であることから、晚春か初夏に卒したと分かるのだが、この詩の始めの一旬も、孟郊が落第した時に包佶は病の床にあつたという消息を語っている。先に「包祭酒に上る」詩を献じたことでもあり、恐らくこの年の受験前に包佶のもとを再度訪ねたのだろう。そしてそういう縁があるが故に、この悼詩を捧げたのだと思われる。包佶の回復を願った気持ちは本当だろうし、「知音」としての恩顧を求めていたことも確かだろうが、この詩も哀悼詩の型を越えて語りかける内容には乏しいと感じられる。包佶の面識は得ていたが、官僚社会においてもまた文学の面においても、深い関係を築くには至らなかつたと判断して良かろう。

### △注△

- ① 「唐方鎮文職僚佐考」では、墓誌の「兵部尚書」に続く三字を不鮮明ゆえに欠字としているが、『隋唐五代墓誌匯編』の写真で見る限り、三字は「薛兼訓」とほぼ判読できる。

- ② 岳溫の「唐故湖南團練觀察使處置等使、通議大夫、使持節都督潭州諸軍事、守潭州刺史、中丞、賜紫金魚袋、贈陝州大都督、

- 東平呂府君夫人、河東柳氏墓誌銘」(『唐文拾遺』卷二七)に「長女適淮南節度掌書記試太常寺奉禮郎豆盧策、次女適前進士

柳淳」と見える。

③ 「旧唐書」の伝には「兗州（山東省）の人」と有るが、「新唐書」で「鄧州南陽の人、兗州に客隠す」と記すのに従う。

④ 貞元九年に及第した柳宗元の「送苑論登第後歸觀詩序」（『柳河東集』卷二）に「[一月丙子、有司題甲乙之科、揭于南宮、余與兄又聯登焉]」とある。「[一月丙子]」は二十七日であり、従つて孟郊が徐州に行つたのは、晚春以降と見られる。

⑤ 貞元十五年には、遅くも初春に徐州へ行つたと見られ、しかも春のうちに徐州を離れている。一月に汴州で乱が起り、韓愈も家族の後を追つて徐州に来ることになるが、その後で作られた韓愈の「此日足可惜贈張籍」詩（『韓昌黎集』卷二）の中、「東野窺禹穴」と孟郊が越へ旅立つていることが示されているので、この年は夏までは滞在しなかつたことが分かる。

⑥ 「清東曲」はこの時に作られた樂府新題であつたらしい。孟郊のこの作品しか残っていないが、恐らくこの宴で張建封以下が競作したのであろう。

⑦ 「新唐書」の伝には「坐善元載、貶嶺南」と有るのみで、具体的な場所は分からぬ。また「旧唐書」卷十一「代宗紀」の大曆十二年四月の条には「癸未：諫議大夫、知制誥韓洄、王定、包佶、徐璜、…起居舍人韓會等十餘人、皆坐元載貶官也」とある。韓愈の兄、韓會と同時の左遷であった。